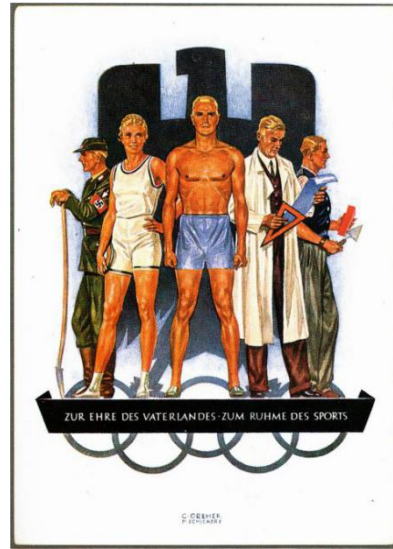


「ベルリン・オリンピックで奇跡を起こした米国エイトクルー」



ベルリン・オリンピックのポスター（伊達仁郎コレクションより）

1930年代、ボート競技は上流階級のスポーツとされ、米国では野球にも並ぶほどの花形スポーツであった。米国東部の大学やクラブ、西海岸のカリフォルニア大学がトップを占める中で、貧しい労働者階級の若者たちの集まりだったシアトルのワシントン大学ボート部のクルーが、並みいる強豪を打ち破って全米チャンピオンになったのである。予想外の出来事であった。そしてオリンピック代表選考レースにも勝ち、ヒトラーのオリンピックと呼ばれた1936年のベルリン・オリンピックへの出場を果たしたのである。

オリンピック開催に向けて、ナチスはベルリンを、非の打ち所のない完璧な街に見せかけようとした。「ジプシー」と呼ばれたロマ人やシンティ人を拘留キャンプに押し込めた。特に前年にユダヤ人の市民権はく奪の「ニュルンベルク法」を公布して、世界中からひんしゆくを買っていたナチスは「ユダヤ人お断り」の看板を公共施設の入口から取り外し、反ユダヤ主義の新聞を売店から引き下げるなど、選手や外国人訪問者に、ベルリンは、すべてにおいて快適で、理想郷のような場所に見えるようにカモフラージュしたのである。

ヒトラーはこのオリンピックをドイツ国民の国威高揚に、そして海外にはナチス・ドイツがいかに人権を重視した理想国家であるかを知らしめるプロパガンダとして最大限に利用した。巨大な競技場を建設し、先端技術を駆使して世界で初めてテレビ放送するなど、ヒトラーはドイツの偉大さを宣伝する好機ととらえたのである。また、ギリシャのオリンピアからの聖火リレーもベルリン・オリンピックが最初で、世界の人びとを高揚感に巻き込んでいった。

そんな中で、ドイツの選手が次々にメダルを獲得し、ヒトラーは得意満面であった。国家予算で養成されたドイツのエイトクルーは、屈強な選手で構成され、ドイツの威信をかけて試合に臨んだ。

片や、アメリカ代表のエイトクルーはボート大会の最後の決勝レースで、思わぬ苦境に立たされたのである。

レース直前、クルーの中の一人、重要なポジションである整調を漕ぐヒューム選手が、風邪をこじらせて、重い気管支炎から肺炎の状態になった。予選のレースは参加14クルー中（日本クルーも参加）トップの記録で通過したアメリカチームであったが、決勝レースの前になって高熱を出して床に伏せていたヒューム選手を見て、ヘッドコーチは、この選手を試合に出すことは出来ないと判断して他の選手に伝えた。

3年間、共に練習し戦ってきたメンバーにとって、最後のレースで全員一緒に漕げないなど、とても考えられなかった。話し合いを始め、話せば話すほど、それを確信し、「ヘッドコーチの決断は受け入れられない。ヒュームはなにがあろうと僕らと一緒にボートに乗らなければならない。僕らは一つのボートに乗ったただの9人ではなく、みなで一つのクルーなのだから」とコーチに談判し、コーチもこれを受け入れた。肝心のヒューム選手が息も絶え絶えな様子では、金メダルを獲れる見込みは限りなく薄いとみての出艇だった。

もう一つ不利な条件は、決勝レースでのレーンの割り当てであった。使われる6つのレーンのうち5レーンと6レーンは風の影響をもろに受け、時には漕ぐのが非常に困難になる一方で、1レーンから3レーンまではレースのあいだ中、ほとんど風の影響を受けない。つまりレーンによって大きな不公平が生じる。決勝レースは、1レーン＝ドイツ、2レーン＝イタリア、3レーン＝スイス、4レーン＝ハンガリー、5レーン＝イギリス、6レーン＝アメリカが割り当てられた。

通常なら予選でいちばん良いタイムを出したチームが一番有利なレーンを取り、予選の成績が下位のチームが不利なレーンに甘んじなければならないが、今回はそれが逆転し、開催国とその盟友国に一番有利なレーンを与え、将来敵対しそうな国に一番不利なレーンを与えるというものであった。

ボート競技の決勝レースの日、雨と風の悪天候にも関わらず、7万5000人の観客がレガッタの会場グリューナウのランガー湖を埋め尽くした。1930年代当時、ボートはオリンピック競技の中で、陸上競技に次ぐ二番目の人気を誇っていたのだ。

午後2時半過ぎ、アドルフ・ヒトラーがゲッベルス宣伝相やゲーリング空軍総司令官らナチスの高官を引き連れてレガッタ会場に意気揚々と入り貴賓席から右手を上げると、「ジーク・ハイル！」（ドイツ語のSieg Heil! 「勝利万歳」の意味）という嵐のような轟きはヒトラーが右手を下げるまで続いた。

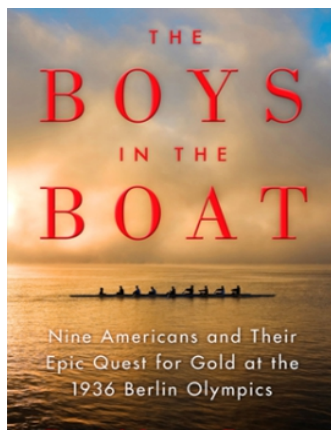
その日に行われたレースに次ぐレースでは、ドイツの選手は他を大きく引き離してゴールし、5番目のレースまですべてで金メダルを勝ち取っていた。6レース目のシングルスカルは英国に次ぐ2位だったが、金メダル5個、銀メダル1個と圧倒的な強さで、最後の花形エイトでも当然金メダルを獲ると確信して、ヒトラーは双眼鏡を手待ち受けていた。

決勝レースのスタートでは、発艇審判が突然あられ、1レーンと2レーンの方を向いて「パルテ！」（フランス語のスタート）と叫び、旗をおろした。6レーンのアメリカのクルーにはその声は聞こえず、旗も見えなかった。スタートで1ストローク半は遅れたことになる。中間の1000メートルでの順位は、1位がイタリア、1秒差で2位ドイツ、さらに1秒遅れでスイス、4位ハンガリー、5位イギリス、6位アメリカは先頭との差は約5秒。1500メートルで1位ドイツ、2位イタリアにアメリカが3位に上がりその差は1艇身（約15メートル）。残り300メートルでアメリカ、ドイツ、イタリアがほぼ横に並び、残り200メートルでアメリカが3分の1艇身ほど前に出て、後は3クルーの壮烈な戦いとなった。

どのチームが勝ったのか、誰にも分からなかったが、結果は、1位アメリカ、0.6秒遅れてイタリアが2位、ちょうど1秒遅れでドイツが3位だった。3クルーがゴールになだれ込んだ時、ヒトラーは拳を高く突き上げたが、結果を聞いて、くると向きを変えると無言で建物の奥に引っ込んだ。ナチスの高官たちも、あわてて後を追った。ドイツのエリート集団に、アメリカの貧しい労働者階級の学生クルーが勝利するとは誰も予想だにできなかったのである。

ところでアメリカクルーのコックスを務めたボブ・モックは、アメリカを出国する前に両親がユダヤ人であることを初めて父親からの手紙で知らされた。ナチスのユダヤ人排斥が激しくなっている当地に行くにあたって、ユダヤ人としてのアイデンティティを忘れるな、という父親からの励みだったのである。

ベルリン・オリンピックのボート競技で9人のアメリカ人青年が奇跡を起こした。この感動の物語はブラウン氏（Daniel James Brown）の著書によって紹介された。



【オリジナル版】 Daniel James Brown 著



【日本語版】 森内薫 訳

ベルリン・オリンピックから75年後の2011年、著者のブラウン氏は、アメリカ・クルーが金メダルを獲得した場所を見ようとベルリンに赴き、ボート競技会場のヒトラーが立ったあたりにたたずんでランガー湖を見渡した。本のエピローグで、著者は「ヒトラーは75年前、コースの後方からアメリカ・クルーが必死に追い上げてイタリアとドイツを追い抜くのを見たとき、自分の運命の予兆を目にしていたのに、それに気づかなかったのだ」とふと思ったと書いている。

【付記】

ボートと聞くと、ボートレース（モーターボートで競走を行う。以前は競艇と呼ばれていた）や公園のお椀ボートのことを思い起こす方もいると思うが、ここで言うボート競技は、人力だけでオールを使ってボートを進める競技である。外国では「ローイング」（英語：Rowing）という言葉が使われ、日本では「漕艇」と言われる。ボート競技には様々な種目があり、大きく分けて、大きいオールを一人一本持って漕ぐスウィープ種目と、小さいオールを一人二本持って漕ぐスカル種目の2つがあり、漕ぐ選手（漕手）の人数が、1人、2人、4人、8人がある。また舵手（コックス）の乗るものと乗らないものがある、次のようになる。

- ① エイト スウィープ艇で、8人の漕手とコックスの計9人が乗る。ボート競技の中では最多の人数で、最も高速の花形種目。選手のポジションの呼び方は、艇の進行方向の艇首から順に、バウ（舳首）、2番、3番、4番、5番、6番、7番、ストローク（整調）の8人と、整調と向かい合うコックス。
- ② 舵手なしフォア、③ 舵手付きフォア、④ 舵手なしクォドルプル、⑤ 舵手付きクォドルプル
4人で漕ぐ種目には、スウィープ艇の舵手なしフォアと、舵手付きフォア、スカル艇の舵手なしクォドルプルと舵手付きクォドルプルの4種目がある。

⑥ 舵手なしペア、⑦ 舵手付きペア、⑧ ダブルスカル

2人で漕ぐ種目にはスウィープ艇の舵手なしペアと舵手付きペア、スカル艇のダブルスカルがある。

⑨ シングルスカル 1人で漕ぐスカル艇で、ボート競技の中で唯一の個人種目。

オリンピックや世界選手権での正式競技は距離2000mで行われる。（英国のケンブリッジ大学とオックスフォード大学の対抗レガッタは4.2マイル（6.8Km）、早慶レガッタは3750メートル）

ベルリン・オリンピックのボート競技の種目は、上述の内、男子のみの①、②、③、⑥、⑦、⑧、⑨の7種目で行われた。

東京オリンピック2020では、男女の①、②、④、⑥、⑧、⑨と男女軽量級⑧の7種目で行われる。日本のボート競技のレベルは低く、出場できるのは残念ながら男子⑨と女子軽量級⑧の2種目だけである。

筆者は京都大学ボート部で4年間エイト（主として整調）を漕いだ。（オリンピックには縁がなかったが、...）

《ベルリン・オリンピック当時、杉原千畝は、日露漁業交渉の通訳官としてカムチャッカのペトロパブロフスクに着任していた。北満鉄道交渉を成功させた翌年の1937年、ソ連から入国拒否が正式通告され、フィンランドのヘルシンキ公使館へ二等通訳官として任命され、横浜港から米国のシアトル、ニューヨーク、ドイツを経由してヘルシンキに着任した。また、日本はベルリン・オリンピックが終わった約3か月後に、日独防共協定をナチス・ドイツと調印した。》

2021年7月

杉原千畝研究会 代表 小野友一